

いの 祈ろう

2010.2.2(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

ダニエル書 9章1節から9節

メディア族のアハシュエロスの子ダリヨスが、カルデヤ人の国の王となったその元年、すなわち、その治世の第一年に、私、ダニエルは、預言者エレミヤにあった主のことばによって、エルサレムの荒廃が終わるまでの年数が七十年であることを、文書によって悟った。そこで私は、顔を神である主に向けて祈り、断食をし、荒布を着、灰をかぶって、願い求めた。私は、私の神、主に祈り、告白して言った。「ああ、私の主、大いなる恐るべき神。あなたを愛し、あなたの命令を守る者には、契約を守り、恵みを下さる方。私たちは罪を犯し、不義をなし、悪を行ない、あなたにそむき、あなたの命令と定めとを離れました。私たちはまた、あなたのしもべである預言者たちが御名によって、私たちの王たち、首長たち、先祖たち、および一般の人すべてに語ったことばに、聞き従いませんでした。主よ。正義はあなたのものですが、不面目は私たちのもので、今日あるとおり、ユダの人々、エルサレムの住民のもの、また、あなたが追い散らされたあらゆる国々で、近く、あるいは遠くにいるすべてのイスラエル人のものです。これは、彼らがあなたに逆らった不信の罪のためです。主よ。不面目は、あなたに罪を犯した私たちと私たちの王たち、首長たち、および先祖たちのものです。あわれみと赦しとは、私たちの神、主のもです。これは私たちが神にそむいたからです。」

ダニエル書 9章20節から23節

私はまだ語り、祈り、自分の罪と自分の民イスラエルの罪を告白し、私の神の聖なる山のために、私の神、主の前に伏して願いをささげていたとき、すなわち、私はまだ祈って語っているとき、私が初めに幻の中で見たあの人、ガブリエルが、夕方のささげ物をささげるころ、すばやく飛んで来て、私に近づき、私に告げて言った。「ダニエルよ。私は今、あなたに悟りを授けるために出て来た。あなたが願いの祈りを始めたとき、一つのみことばが述べられたので、私はそれを伝えに来た。あなたは、神に愛されている人だからだ。そのみことばを聞き分け、幻を悟れ。」

ダニエル書 10章9節から12節

私はそのことばの声を聞いた。そのことばの声を聞いたとき、私は意識を失って、うつぶせに地に倒れた。ちょうどそのとき、一つの手が私に触れ、私のひざと手をゆ

さぶった。それから彼は私に言った。「神に愛されている人ダニエルよ。私が今から語ることばをよくわきまえよ。そこに立ち上がれ。私は今、あなたに遣わされたのだ。」
彼が、このことばを私に語ったとき、私は震えながら立ち上がった。彼は私に言った。「恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだろうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ。私が来たのは、あなたのことばのためだ。」

ダニエル書 10章19節

「神に愛されている人よ。恐れるな。安心せよ。強くあれ。強くあれ。」彼が私にこう言ったとき、私は驚いて立って言った。「わが主よ。お話してください。あなたは私を力づけてくださいましたから。」

私たちは、いったいなぜ、そして何のために救われたのでしょうか。このことはいつも考えるべきだと思います。まず、主に仕えるため。それから、再臨を待ち望むためです。

したがって、再臨を待ち望まない人、主のために生きたいと思わない人は、果たして救われているかどうか疑問ではないかと思います。

パウロ、また一緒に働いている同労者たちは、「私たちは神の同労者です」と言うことができました。「私たちは神と共に働く者である」と、心から言うことができたのです。

いわゆる「祈りの輪」は大きくなり、現在六百七十一人だそうです。それだけだったらちょっと...？ 自分の名前を書いてない人が割合多いようです。今朝も、T 姉妹から電話があり、「私は入っていないけれど、本当は祈っています」と。他の人よりも祈っているのではないのでしょうか。今ずっと38度5分の高い熱があり、どのようになるか分かりませんが、「祈っている」と聞くと嬉しくなります。主が望んでおられるのはそのことではないのでしょうか。「主と共に働きたい」。これこそ、私たちの切なる願いであるべきではないのでしょうか。私たち救われた者は、何があっても祈り続けましょう。

この間、心苦しかったのですが、ドイツのミヘルスベルクの責任者に手紙を出して、「ごめんなさい。二十八人の方々と相談した結果、やはりミヘルスベルクでのキャンプは止めます」と。本当の意味での一致がなければ、偽善的な行為でしょう。もし、みなが一つになれば豊かな祝福がありますが、今現在一致がないので、ミヘルスベルクでのキャンプは一度止めると書いたとき、次の日すぐEメールが来たのです。「ちょっと小さなショックだったけれど、(来てもらいたかったのですが、)その理由は分かります。祈ります。しかし、来年はどうですか？ 来るの?」と。

ダニエルはどういう男であったかと言いますと、私たちは彼について何を考えているか、^{ある}或いは彼は自分について考えていたのか、(それは別にどうでも良い話しだとして、) 言えることは、彼は「主と共に働く者」でした、と。

今、読んでいただきました箇所の中で、三度も同じ表現が出てきました。「神に愛されている人」、「神に愛されている人」、「神に愛されている人」と。これは素晴らしい言葉ではないでしょうか。最後の10章19節です。

ダニエル書 10章19節

「神に愛されている人よ。恐れるな。安心せよ。強くあれ。強くあれ。」彼が私にこう言ったとき、私は^{ふる}驚い立って言った。「わが主よ。お話しください。あなたは私を力づけてくださいましたから。」

先ほど歌いましたように、「主よ、語ってください」と。そのような、心からの願いがあれば心配ありません。しかしここで何度も、「神に愛されている人」とあります。この言葉は、主の御口から出た、^{おどろ}実に驚くべき恵みに満ちた言葉です。

主は、決して^{うそ}嘘をお^{かた}語りになりません。小さなことを、いかにも大きいものであるかのように^{こまごま}誇張して話すこともなさいません。主が語られるなら、真実をもってご自分のみこころをそのままお語りになります。主はダニエルに、「我が愛する人よ」と声をおかけになりましたが、そうお語りになるには、何か理由があるはずです。主なる神、^{ぜんち}全知なるお方が、そう言われるには、その後ろに何か理由があるはずです。「わたしはあなたを愛している」。これは、ダニエルに対する主なる神の判断でした。

もし、私たちにも、同じみことばを主からいただけたとするなら、どんなに幸いなことでしょう。もちろん主によって愛されていない人はいません。みな大いに愛されています。

聖書の一番よく知られている箇所^{かしよ}を見ても分かります。

ヨハネの福音書 3章16節

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして^{ほろ}滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

「世を愛された」とは、「私」を、「あなた」を愛された、ということです。

ローマ人への手紙 5章8節

私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

イエス様の^{みが}身代わりの死は、考えられないほど愛されている^{しやうご}証拠です。

また、ヨハネもその第一の手紙4章9節に書いたのです。

ヨハネの手紙・第一 4章9節、10節

神はそのひとり子を世に^{つか}遣わし、その方によって私たちに、いのちを^え得させてくだ

さいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

主は汚れた罪人を愛し、この世すら愛していてくださるということを思うと、主のご愛に対して「賛美と感謝」が湧き上がってきます。全宇宙をお造りになられたお方が、限らない栄光のうちに住んでおられるお方が、その御位を捨てて、罪を犯し、汚れ、主なる神に逆らう者たちを救うために、人間の形をおとりになって、地上に来られたということは、人間の頭では決して理解することができません。けれどそれは、驚くべき神の「愛そのもの」なのです。

では、主はダニエルに向かってなぜ、「大いに愛されている人ダニエルよ」と言われたのでしょうか。ダニエルが罪人だったからでしょうか。主に逆らう者だったので、ダニエルを愛されたのでしょうか。決してそうではありません。ダニエルは、「主と共に働く者」だったからなのです。即ち、祈りにおいて「主と共に働く者」でしたから、「主に大いに愛された人」と呼ばれたのです。ダニエルの祈りは、天に届いたのです。

「天にまで届く祈り」とはどのような祈りであるべきかについて、一緒に考えてみたいと思います。

* 第一番目。みことばに基づいた祈りです。

ダニエル書 9章2節

すなわち、その治世の第一年に、私、ダニエルは、預言者エレミヤにあった主の**みことば**によって、エルサレムの荒廃が終わるまでの年数が七十年であることを、文書によって悟った。

彼は、必ず「主よ、語ってください」と祈り、心の眼が開かれ、「悟った」とあります。このことから、ダニエルは聖書を読んでいたことが分かります。みことばは、ダニエルの心の第一の座を占めていました。ダニエルは自分の考えを交じえず、祈りながら主のみことばを読みました。「主よ、語ってください」。彼はただ聖書の知識を蓄えるだけでなく、主のみこころを正確に知り、それを行なおうとしてみことばを読んだのです。私たちは、どのような態度でみことばを読んでいるのでしょうか。どのような理由で、みことばを読むのでしょうか。

「天に届く祈り」をする前に、まず私たちは今の時代における私たちに對する「主のみこころは何か」、「主のご目的は何か」、「主は私たちをどのように判断されておられるか」を、知る必要があります。

ダニエルが祈ったとき、その祈りは確かに聞かれました。天に届きました。それは、彼が主のみこころをよくわきまえ、知っていたからです。主は何を考えておられるのか、どのように導こうと思われるのか、ダニエルははっきり確信していました。もし、ダニエルが主のみこころを知っていなかったなら、どんなに熱心に祈っても、何も起こらなかったでしょう。

多くの人、祈り、求め、いろいろな願いを主に申し述べますが、聞き届けられません。それは主のご目的を知らず、むやみに祈るからです。ダニエル書には、将来何が起こるかいろいろ預言されていますが、この預言を研究してその知識を蓄えても、もし、私たちの實際生活が主によって変えられていかなければ、何の役にも立ちません。したがって、ダニエル書の中から、預言的なことよりも、むしろダニエルの人格を学び、それを自分のものとしていきたいと願うべきではないでしょうか。とりわけダニエルの祈りを学び、私たちもダニエルのように祈り人になりたいと思います。

私たちは何よりもまず、今の時代における主のご目的を知らなければなりません。その他のことはみな第二次的なものです。ダニエルは、信じる者たちに対する主のみこころをよく知っていました。もし私たちが「愛されている人よ」と主に呼ばれたいなら、私たちもダニエルと同じように、主のご目的を知らなければなりません。

新約聖書の時代、パウロは、全世界を伝道旅行し、全世界の信者と連絡を取り、各地でご奉仕しました。しかし、主は、そのパウロが突然牢獄に入ることをよしとされました。どうしてでしょう。それは、パウロに今の時代における主のみこころは何であるかを教えるために、そのことを考える「時」をお与えになるためでした。パウロが、牢獄で記したエペソ書、コロサイ書、ピリピ書を読むと、その書簡の中に、主の永遠の秘密がパウロに現わされていたことがすぐ分かります。つまり、信じる者は「イエス様のからだ」であり、また全く天的なものであり、そのかしらにイエス様をいただいているものです。多くの人々は、信じる者の群れが全く天的なものであり、霊的なものであり、世界的なものであることを知りません。

ダニエルは、その時代における主のご目的をよく知っていたばかりではなく、主はこのご目的を一つの狂いもなく成就されるお方であることを確信したのです。これこそ、ダニエルの祈りが天を動かした原因だったのです。それがもし実現されないことであるなら、熱心に祈る人は誰もいません。それは、必ず実現するという確信があって初めて、熱烈な祈りを捧げることができます。

ダニエルは主がご目的を変えられないことを知り、ご目的を必ず成し遂げられると確信して祈りましたから、彼の祈りは天に届きました。

パウロは、エペソ書の終わりに次のように書きました。

エペソ人への手紙 6章18節

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

「絶えず祈り、どんなときにも御霊によって祈り、すべての聖徒のために祈りなさい」と。私たちはこの標準から何と遠く離れていることでしょう。

ダニエルは主のみこころを知るとともに、今、自分が置かれている周囲の状態をもよく知っていました。彼は、主の敵バビロンに捕らわれの身となっていました。バビロンに「神の民イスラエル」が捕らわれているということは主の最善のみこころではないと、ダニエルは確信したのです。

イスラエルの民はバビロンに捕らえられ、「今は仕方がない」、ここでできるだけ良い暮らしをしよう、「妥協しても仕方がない」と思い、霊の力を失くしてしまっていたのです。しかしダニエルは違いました。彼はバビロンに捕らわれていたにもかかわらず、あらゆる周りの環境に打ち勝ち、天に属する民であるとの誇りと確信を失わず、何とかしてイスラエルの民の霊的な状態を回復させ、エルサレムに導き戻そうと、主に祈り求めたのです。聖書を読むと、ダニエルは毎日三度窓を開け放し、エルサレムを望み見て祈りを捧げたとあります。エルサレムは、私たちにとって、「主のからだなる教会」を象徴するものです。

私たちは、主のご目的をよく知るときにのみ、周りの状態もよくわきまえ知ることができます。私たちは、自分の状態をよく知っているのでしょうか。私たちの群れは、エペソ書に書いてあるような素晴らしい教会なのでしょうか。エペソ書から、何箇所か読みましょう。

エペソ人への手紙 1章22節、23節

また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

エペソ人への手紙 2章21節、22節

この方において、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、このキリストにおいて、あなたがたとともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

エペソ人への手紙 3章9節から11節

また、万物を創造された神の中に世々隠されていた奥義を実行に移す務めが何であるかを明らかにするためにほかなりません。これは、今、天にある支配と権威とに対して、教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためであって、私たちの主キリスト・イエスにおいて実現された神の永遠のご計画に沿ったことです。

エペソ人への手紙 3章20節、21節

どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

エペソ人への手紙 4章12節、13節

それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

エペソ人への手紙 5章27節

ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

エペソ人への手紙 5章30節

私たちはキリストのからだの部分だからです。

私たちは、まだまだ主のみこころからほど遠いところにいます。ある兄弟姉妹は来なくなりました。また、霊的に押しつぶされて立ち上がれなくなっています。このようなとき、ダニエルのように霊の燃え上がりを待ち望み、新しく生かされるために、主のみこころを注ぎ出す祈りの勇者はどこにいますでしょうか。私たちは一つになって、このために祈りたいものです。

「天に届く祈り」をする前に、今の時代における私たちに対する主のみこころが何であるかを、まず知る必要があります。次に、周囲の状態をも知る必要があります。

私たちが悩み苦しむ目的とは、いったい何でしょうか。

主は、ご自分の目的を達成するために、ありとあらゆる事がらを用いてくださいます。これを心に深く止めておくことが大切です。ダニエルは、今、イスラエルの民がバビロンで苦しんでいる苦しみも、主が用いてエルサレムに連れ戻すために役立たせてくださると信じていました。

主はご自分の目的が何であるかに心の目が開かれるようにと、ご自分に属する者を試みられます。その試みは、病、死、いろいろな苦しみなどがあります。これは私たちにどうしても説明できない理由です。主は、私たちの理性を高め、動かされないものにするため、あらゆる出来事を用いられます。

主は、全世界に対して、どのようなご目的をもって働いておられるのか、また、教会や私たち個人の生活に対して何を望んで働いておられるか、私たちはそれを知っているでしょうか。

私たちは、次の二つのうちどちらを選び取って、日々生活するのでしょうか。

・イスラエルの民のように、バビロンに捕らわれ、仕方がないと諦め、この世を友として妥協し、毎日を過ごすのでしょうか。或いは、ダニエルとその友だちのように、主のご目的は必ず成ると信じ、主のみこころにかなった清い歩みをしているのでしょうか。

・ダニエルとその友だちは自らを主に捧げることにより、「主と共に働く者」となりました。

ダニエルが祈ったとき、この祈りは聞かれました。天に届きました。低い天にいる悪魔にも届きましたが、いと高き所におられる主なる神にも祈りは達し、みこころをダニエルを通して行なうために天使が遣わされました。ダニエル書 10章 12節から読みます。

ダニエル書 10章 12節から 14節

彼は私に言った。「恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだろうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ。私に来たのは、あなたのことばのためだ。ペルシヤの国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれたので、私は彼をペルシヤの王たちのところに残しておき、終わりの日にあなたの民に起こることを悟らせるために来たのだ。なお、その日についての幻があるのだが。」

とあります。

ダニエルがへりくだろうと決めた日、動きがありました。心の目が開かれ、主の永遠のご目的が何であるか、また私たちは、今どんな状態に置かれているか、また、私たちに与えられる悩みの目的はいったい何であるかを知るならば、祈りに力が加わります。これをよく知っている人たちは、ダニエルと同じように、天を揺り動かす祈りをする事ができます。

「天にまで届く祈り」はどのような祈りなのでしょう。今、話しましたように、「みことばに基づいた祈り」です。祈ることだけでは充分ではないのです。「祈り」とは、みことばに対する答えでなければならないのではないのでしょうか。

天にまで届く祈りには、もう一つの答えがあります。

* 第二番目。私たちは、生活のうちに「生きた証し」を持っていなければなりません。

ダニエルの祈りは聞き届けられました。いったいどうしてでしょうか。彼は、あらゆる点において「主に反するものから全く離れた生活」をしたからです。

1. 彼は自分自身を喜ばせることから離れていました。

もし、私たちが主のご目的を思わず、自らの願いで祈るなら、祈りは天に届かないでしょう。自らの目的は本当の祈りを妨げます。ダニエルは、自らを喜ばせようとする何ものも持っていなかったのも、主は、「愛されている人よ」と、ダニエルに呼びかけることができになったのです。

パウロは、悩みながら書いたでしょう。ローマの刑務所から。

ピリピ人への手紙 2章21節

だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。

ピリピ人への手紙 1章21節

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。

全く違います。

2. ダニエルは、この世の方法から全く離れていました。

異邦の民が願い、目指している、主に反する目的、方法には、少しも妥協しなかったのです。こんにちの信じる者はどうでしょうか。多くの信じる者は、この世と同じ生き方をしたいと願っています。しかし、ダニエル、またダニエルの友だちは、全く違いました。よく読む箇所ですが、もう一度読みましょう。

ダニエル書 3章16節から18節

シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはネブカデネザル王に言った。「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。もし、そうなれば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拜むこともしません。」

「私たちの仕える神」、信じる神だけではありません。信じている者の多くは、この世にあって認められ、賞賛されようと努め、上にある朽ちないものを求めようとしません。この世の流行を追い、この世と同じ生き方をして、どうして証しできるのでしょうか。

3. ダニエルは人を恐れませんでした。

ダニエルは当時、最も権力を持っていた王をさえ決して恐れなかったのです。

ダニエル書 1章8節

ダニエルは、王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定め、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願った。

ダニエル書 6章10節、11節

ダニエルは、その文書の署名がされたことを知って自分の家に帰った。彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。すると、この者たちは申し合わせてやって来て、ダニエルが神に祈願し、哀願しているのを見た。

ダニエル書 6章16節

そこで、王が命令を出すと、ダニエルは連れ出され、獅子の穴に投げ込まれた。王はダニエルに話しかけて言った。「あなたがいつも仕えている神が、あなたをお救いになるように。」

「あなたがいつも」(たまにはではない)です。

ダニエル書 6章23節

そこで王は非常に喜び、ダニエルをその穴から出せと命じた。ダニエルは穴から出されたが、彼に何の傷も認められなかった。彼が神に信頼していたからである。

もし、私たちが人を恐れ、人にへつらうなら、ダニエルのように力ある祈りは、決してできません。

4. ダニエルは、この世のいかなる関係にも心を奪われなかったのです。

この世と関係を持たないことは、ダニエルとその友だちにとって、決して生やさしいことではなかったのです。ダニエルは獅子の穴に投げ込まれ、友だちは燃える火の炉に投げ込まれてしまったのです。主はそのことすべてを許されたのです。

彼らの前にはその時二つの道があったでしょう。一つは、世と妥協して居心地よい生活をする事、もう一つは、獅子の穴と火の炉でした。彼らは主の道を選び取りました。妥協せず、自らを主に捧げ切って、いのちまでも惜しみませんでした。主は彼らの祈りを聞き、み栄えを現わされました。

ダニエルは、このように主に反するものから全く分離していましたが、それと共に一つの目的に心を定めました。

ダニエル書 10章12節

彼は私に言った。「恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだろうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ。私が来たのは、あなたのことばのためだ。」

「心を定め」とあります。ダニエルの心は主のご目的に集中^{しゅうちゅう}され切っていました。私たちの心は、主にいいなづけされた^{きよ}清い乙女^{おとめ}であるキリスト集會のために集中され、祈りにその心を注ぎ出しているのでしょうか。

パウロは、主のみこころを知って祈りを捧げました。

コリント人への手紙・第二 11章2節

というも、私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。

とあります。

浮き草^{うきくさ}のように定まらない心ではなく、主のご目的に思いを定めた心を主は祝福してくださるのです。私たち信じる者が各自、^{かくじ}「イエス様をかしらとする生ける神の教会」であるとの^{じかく}自覚を持って集まり、心を定め祈るなら、天の窓が開きます。祈りは豊かに聞き届けられるのです。

パウロの証しは本当に素晴らしいものです。コリント第一の手紙9章24節と25節をお読みいたします。

コリント人への手紙・第一 9章24節、25節

^{きょうぎじょう}競技場で走る人たちは、みな走っても、^{しょう}賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。また^{とうぎ}闘技をする者は、あらゆることについて^{じせい}自制します。彼らは朽ちる^く冠^{かんむり}を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。

ピリピ人への手紙 3章14節

キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目標として一心に走っているのです。

ヘブル書の著者も、同じような言葉を書いたのです。

ヘブル人への手紙 12章1節

こういふわけで、このように多くの証人^{しやうにん}たちが、雲のように私たちを取り巻いて^とまわっているのですから、私たちも、いっさいの^{おもに}重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている^{きょうそう}競走を^{じんたい}忍耐をもって走り続けようではありませんか。

ダニエルは大いに用いられました。なぜでしょう。それは彼が、主のみこころに反するものから全く分離していたからです。彼は一つの目的に心を定めたからです。もちろん、彼は忍耐を持っていたからです。

もう一度ダニエル書に戻りまして、
ダニエル書 10章12節、13節前半

彼は私に言った。「恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだろうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ。私に来たのは、あなたのことばのためだ。ペルシヤの国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、」

とあります。

ダニエルは、心を込めてちょうど三週間、二十一日間、主のみ前に祈り込んだのです。一つの問題のために二十一日間祈るということは、決して簡単ではありません。私たちの場合は、どうでしょう。このような祈りを捧げたことがあるでしょうか。主の前に一つの問題を携えて、ほんのしばらくの間祈り、すぐに立ち上がってしまいます。ですから、何も起こらないのです。祈りの答えがないのです。ダニエルは忍耐深く一つの目的のために主の前に留まり、祈り続けました。忍耐深い祈りをもってこそ、初めてダニエルのように素晴らしい経験をすることができるのです。

アブラハムも、同じ態度をとったようです。

創世記 18章22節後半

アブラハムはまだ、主の前に立っていた。

そして、

創世記 19章29節

こうして、神が低地の町々を滅ぼされたとき、神はアブラハムを覚えておられた。それで、ロトが住んでいた町々を滅ぼされたとき、神はロトをその破壊の中からののがれさせた。

とあります。アブラハムの祈りの結果として。

5. ダニエルが用いられたもう一つの理由は、彼の節制だったのではないのでしょうか。

前に読みました10章12節によると、「ダニエルは、主の前でへりくだろうと決めた」と書いてありますが、これはダニエルが「己に打ち勝った」、その戦いを表わしています。

ダニエルは、自分の考え、自分の意志、自分の感情に負けずに、それを克服しました。ダニエル書10章3節にも、ダニエルがいかに節制したかが書かれています。ダニエルは、

少しも自分に益することを考えず、すべてを主に捧げました。

御霊が私たちを支配してくださり、私たちがただ一つ、主のご目的をなそうとする熱意に燃えるようにしてくださるなら、本当に幸いなことではないでしょうか。

パウロは、コリントにいる兄弟姉妹に書きました。

コリント人への手紙・第一 9章25節

また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。

6. ダニエルが用いられた、また別の理由とは、「彼の確信」でした。

ダニエル書 10章12節後半

「あなたのことばは聞かれているからだ。」

「既に聞かれた」とダニエルは確信しました。ダニエルは、主のみこころを知っていましたし、祈りの通りに主はなしてくださることを信じて待ち望んでいました。

祈りが主に聞き届けられるには、このように、「主のみこころを知り」、「結果を期待し」、「確信する」ことが必要です。主のみこころを知っていなければ、何をどのようにして祈って良いか分かりません。

もし、私たちが主のみことばにより、そのみこころを知るなら、それは私たちの力となることは間違いありません。「主と共に働く」ことこそ、私たちに与えられている最も大切な使命なのではないでしょうか。

私たちは、ダニエルと同じように、主は何をなそうとしておられるのか知っているでしょうか。もしそれを知ると、ダニエルを襲ったような悪の霊の働きからの攻撃を、身近に感じるようになります。

パウロも同じことを経験しました。悪魔は、パウロを集中的に攻めました。コロサイ書4章を読むと、次のように書かれています。

コロサイ人への手紙 4章2節、3節

目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています。

もう一箇所、読んで終わります。

テサロニケ人への手紙・第一 2章18節

それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。このパウロは一度なら

ず二度までも心を決めたのです。しかし、サタンが私たちを妨さまたげました。

主が、ダニエルやパウロにしてくださったように、「私たちの心の目を開き」、何をおいてもまず「主とともに働く者」となりたいという願いを持たせてくださるなら、本当に幸いと思います。

主が、私たちに向かって、「大いに愛されている人よ」と呼びかけてくださるようになったなら、本当に幸いです。

了